

---

# IS <インフィニット・ストラトス> ふもっふ？

ユーリ・ローウェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> ふもっふ？

### 【Nコード】

N3648Y

### 【作者名】

ユーリ・ローウェル

### 【あらすじ】

夏休みのある日、宗介とラウラはアリーナで訓練をしていた。だが二人は突如現れた光に包まれ、気づいたらアリーナのままだったが…  
これは、インフィニット・ストラトスふもっふ？の宗介とラウラが原作に介入してしまう話です。

## 第1話・同じように別の世界（前書き）

前々から考えていた宗介とラウラのES原作介入のお話です。ストーリー上、同じキャラが二人出てくることもあると思います。主にラウラが…

ではごっげ。

## 第1話・同じようで別の世界

「いくぞ宗介」

「来いラウラ」

夏休みのある日、学園のアリーナで珍しく模擬戦をしている二人。次第にお互いの攻防が激しくなり、ラウラはアロンドイト、宗介はディムロスを振りかぶり、空中で激しく激突する。

その時、二人を中心として光が発生して二人はその光に包まれてしまった…

「いたた。ちょっと無理をしすぎたかな」

「あ、ああ」

二人は気づくといつの間にか機体から降りていた。と、そこに見なれた黒いスーツを着た千冬が現れた。

「すみません織斑先生。少し派手に…」

宗介は千冬に謝ろうとしたのだが…

「誰だ貴様は、それに…何故ここにお前が居るのだボーデヴィツヒ？」

「何を言っているのですか先生。宗介をですよ」

「だから誰なのだ貴様は。ボーデヴィツヒ、その男、私についてこい。無論、拒否権は無い」

意味が分からないでいる二人は頭に？を作りながら千冬について行く。行きついた先は学園の職員室だった。

「まず一つ、お前は何者なのだ？」

「…自分は相良宗介であります」

「何を目的に学園に侵入してきた」

「侵入などしていません。自分はこの生徒であります」

「嘘を言つな。この学園はISの関係上、一人の男子生徒しかおらぬ、当然お前では無い」

千冬に言われる宗介は学園に転入してきた時の学生手帳を千冬に見せる。

「これが証明であります」

千冬はまじまじと生徒手帳を見る。

「確かにこの生徒手帳だな、ではどう言う事なのだ…」

ここまで静かだなと思った宗介はラウラの方に視線を移すと、ラウラは手近にあった新聞を呼んでいた。

「おい宗介、日付が四月だぞ。私達は確か夏休みの八月だったはず…」

「何、では俺達は過去に来たのか？」

「いや…織斑先生。少しパソコンを借ります」

「おい、勝手な…」

千冬が制止を掛けようとするが、ラウラはそれ以上早く動いてパソコンの前に行き、色々と調べる。

「やはりな……」

「どうだったラウラ？」

「ああ、この世界にASは存在していない」

「……つまり、俺達はまた違う世界に……世界線を越えたと言っのか？」

「ああ、そのようだ」

「おいお前達。いい加減説明してもらおう」

千冬はドンッと机を叩きながら言う。その表情は今にも怒りそうな感じだった。一般人が見れば間違いなく怯える位の迫力だがこの二人は慣れているためサラツとしていた。

「はい、私達は違う世界から来たとい事になります」

「……ポーデヴィツヒ。お前はいつからそのようなふざけた事を言うようになったのだ？」

「いえ、結構真面目なんですけど……宗介。どうする？」

「そつだな……これを見せて見たらどうだ？」

そう言いながら宗介はポケットから一枚のカードを取り出した。そう、サモンカードである。

「なんだそのカードは？」

「もう一度外に出て貰っても構わないでしょうか？」

「いいだろう」

三人はもう一度先ほどのアリーナに向う。そして宗介はカードを軽く操作して、その場でアーバレストを取り出す。

「なっ…これはIS…？」

「いえ。これはASです」

宗介は千冬にASの事を説明する。説明を聞いている千冬の顔がだんだんと険しくなっているのを二人は気づく。

「全身装甲。こんなの私は今までに見たことが無い…」

「ASは俺達の世界では普通に普及しています。これが証拠です」

「…しかたがない。お前達が違う世界から来た事は信じよう」



千冬はようやく信じてくれたようで二人はホッとする。

「そうなるとお前達にはこちらの学園に入ってもらつ事になるが…」

「自分は問題ありません!!」

「私はもっと夏休みを満喫したかったのに…」

こうして二人は違う世界のIS学園に編入する事になった。

「ところでボーデヴィツヒ。先の話だとお前は今この世界に二人居る事になるのだな？」

「そういえばそうなりますねって宗介。凄いで、自分に会えるんだぞ!!」

何故か自分に会えると言う事にテンションが上がっているラウラであった。

## 第1話・同じように別の世界（後書き）

原作の時間軸はセシリアとの決闘二日前です。次は宗介と原作セシリアとの戦いです。

## 第2話・宗介とラウラ、転入する（前書き）

と言ってもIS学園 IS学園に転入と言っちゃやこしい展開になりますね。

## 第2話・宗介とラウラ、転入する

その後、寮の部屋を一つ貰うことが出来た宗介とラウラ、本当は男女別々なのだが部屋が無く二人は同じ部屋になったのだが。二人はもう何度も同じ部屋で生活をしているのでいつもと余り変わらずだった。

そして次の日、二人は千冬に連れられて教室の前に連れてこられる。勿論一年一組だった。

「静かにしろ、今日急だが二人転入する事になった。入ってこい」

千冬に言われると二人は教室に入って来る。

「では二人共、自己紹介をしろ」

「はっ！！」

まず、前に出たのは宗介だった。

「自分は相良宗介であります。趣味は釣りと読書、主にAS図鑑を愛読しています」

クラスの皆は「AS図鑑？」となっているが、ラウラだけ笑いをこらえていたのだ。

「わ、私はラウラ・ボーデびっぴ…でしゅ…」

そして、ラウラは自分の名前を噛んで滅茶苦茶顔を真っ赤にしていた。そして、静かだったクラスが…

「きゃあああああ。二人目の男子キター」

「織斑君と同じワイルドそうでイケメンよー」

「ラウラちゃんも可愛すぎてお持ち帰りしたいよー」

クラスが急に騒がしくなり、二人はびっくりして一歩後ろに下がってしまふ。

「静かにしろお前ら。相良は織斑の隣、ボーデヴィッツは相良の隣だ」

宗介とラウラは元の世界と全く同じ席に座った。

「では、授業を始める…」

授業が始まって三十分、お決まりのようにラウラは睡眠、千冬の出席簿アタックが頭に炸裂していた。そして休み時間。

「えっと相良だよな。俺は織斑一夏、いや〜男が来てくれて助かったぜ。男どうし仲良くしようぜ」

隣に座っている一夏が話しかけてきた。

「ああ。俺はかまわん」

「それにしても、千冬先生の出席簿は痛いな」

頭をさするラウラ、だが元の世界でも千冬のハリセンを受けているラウラだからこそこれだけで済んでいるのだ。

「おっ、私も友達になってくれるか一夏？」

「あ、ああいいぜ。俺はラウラって呼んで良いか？」

「構わないぞ〜」

すると、三人の元に金髪ドリル元いセシリアがやってきた。

「あら、男性である貴方は何故ここに居るのですか？」

「いろいろと事情があるんだオルコット」

「まあ、初対面なのに馴れ馴れしいですわね」

そこで宗介はしまったと思った。宗介はいつものようにセシリアに話しかけてしまったのだ。

「それで貴方はどれ位ISを動かせるのですか？」

「俺はISでは無い、ASに乗りだ」

セシリアは聞き慣れないASについて聞き直そうとしたが、そこで次の授業のチャイムが鳴り、セシリアは席に戻って行く。次の授業もISの座学、ラウラにとって退屈以外何者でもなく睡眠、千冬の出席簿アタックの流れ。その次の授業ISを使った実践授業だった。

「今日、お前達にとって初の実践授業だ。心してかかれ」

アリーナに一組の生徒全員ISスーツを来て並んでいた…宗介とラウラ以外は。

宗介はいつものパイロットスーツ。ラウラにいたってはTシャツにハーフズボンの姿だった。

「相良は良いとしてボーデヴィツヒは…仕方が無い、今日はそれでいい。ではまず、専用機持ちの動きを見て貰う。オルコット」

「はい!!」

すると、セシリアは直ぐに愛機、ブルーティアーズを展開して空を飛ぶ。皆は滅多に見ない専用機に目が行っているが、二人は違う所を見ていた。

「あれは初期のブルーティアーズだな」

「ああ。武装もフィンでもないからな」

そうこうしている内に、セシリアは地面に着地していた。

「これが、ISの中でも特別なもの、専用機だ。これは国家の代表及び候補生にしか与えられないものだ」

千冬の発言に皆、真剣に聞いている。



「よし、今から各自班ごとに別れて実際に動かしてもらおう。打鉄を  
用意して来るから少し…」

「すこしよろしいでしょうか」

そこに宗介が手を上げて千冬の動きを止める。

「何だ相良？」

「オルコットと模擬戦をしたいのですがよろしいでしょうか？」

宗介の発言でクラスメイトはびっくりしていた。セシリアや後ろに  
居る篤もだ。

「あ、あなた。専用機はお持ちなのですか？」

「ああ。問題ない」

ここで、千冬は未知数の宗介の実力とASの能力を見定めるチャン  
スかとも思い…

「いいだろう。ただし、時間は三十分だけだ」

すると、アリーナには宗介とセシリアの二人のみ。他の皆は観客席に移動していた。

「では、貴方の専用機を見せていただけませんかしら？」

(レーバティンでは差がありすぎる。ここは…)

宗介はサモンカードを取り出し、アーバレストを出して乗りこむ。

「ぜ、全身装甲!!」

「では行くぞ」

宗介は単分子カッターを右手に持ちセシリアに斬りかかる。だが、セシリアはすぐさま上空に飛ぶ。

「あら、もしかしてそのISは空が飛べないのですか？それなら…お別れですわ」

そう言うセシリアは主武装のスターライトmark?を撃つが、宗介は素早く避け、後ろ腰に装備してあるボクサーで応戦する。

「な、なあラウラ。宗介のあれって飛べないのか？」

「ああ。ASは基本、飛行は出来ないのだ。だが問題あるまい」

「何でだよ？飛べないのは不利だぞ？」

「ふっ、その程度。あいつにとって差異ではないからな」

正直、セシリアは焦っていた。最初、宗介のアーバレストを見た時、全身装甲で防御型と思った。だが、俊敏に動き、飛行が出来ないと知った時は何とかなると思ったが、またもやアーバレストはちゃんと自分の動きに対応していたのだ。

「アル、データ収集はどうだ？」

『全て終了いたしました軍曹』

「よー」

宗介は今の今まで積極的には攻めていなかった。その理由はブルー

ティアーズのデータを集めていたのだ。そして、それを終えた宗介はアーバレストをセシリア目掛けて跳んだのだ。

「さあ、これが私のブルーティアーズですわ！！」

セシリアも背中にあるBT兵器を四つ宗介目掛けて飛ばす。

(ストライク・ブルーティアーズのフィン・ファンネルより遅い、なら)

アーバレストは空中で両手に単分子カッターを握り。次の瞬間、それを二機のBT兵器に投げ同時に仰向けにあり両足の裏に内蔵してあるヒートダガーをもつ二機のBT兵器目掛けて放つ。

すると次の瞬間、四つのBT兵器は同時に爆発して、それを見るセシリアは驚く。その隙に宗介はスターライトmark?にワイヤーを絡ませて接近する。

だが、セシリアの表情がニヤリとして…

「かかりましたわね、BT兵器は六個ございまして…」

だが、セシリアの目の前にアーバレストの姿が無かった。そう、アーバレストはターザンの様にワイヤーを利用してセシリアの背後に振り子のように周り、片手でボクサーを撃ちセシリアのシールドエ

ネルギーを大幅に減らす。  
散弾銃をもろに受けたセシリアはそのまま地面に何とか着地するが…

「チエックメイトだ」

セシリアの目の前にディムロスを構えている宗介がそこにいた。

(AS:最初はどんなびつくり兵器が出ると思ったが見た感じIISと大差はない。だが、あいつの技量は以上だ。相良はあれでまだ本気を出していない)

今の戦いを観客席で見っていた千冬は考える。だが、彼女の考えは大  
半当っていたのだ…

(これは世界にどう影響をもたらすか…だな)

これは織斑一夏とセシリア・オルコットの決闘一日前の出来事だっ  
た。

## 第2話・宗介とラウラ、転入する（後書き）

ここでは宗介は勝ちました。現に彼は本編では公式戦でセシリアに負けていますから、何かと因縁はある組み合わせかなと思いました。次は原作と通り一夏とセシリアの決闘です。

### 第3話・クラス代表（前書き）

ああ、最近リアルが忙しすぎて中々投稿出来ずにいます。

ああ、はやくラウラ（原作）を出したい。そうすればダブルラウラ  
でいじれるのに…

### 第3話・クラス代表

さて、宗介とセシリアとの模擬戦から一日、一夏とセシリアとの決闘になったのだが。結果は原作と同じようにセシリアの勝ちで終了したマル。

そして、恒例通りにセシリアは一夏に惚れた。以上

「と、言う訳でクラス代表は織斑に決定する」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺は昨日負けんだぜ、それならセシリアに勝った相良がなるべきなんじゃないか？」

クラス代表選から一日後のLHR。千冬はクラス全員にクラス代表を一夏にすると言い、一夏はそれに納得しないように抗議する。

「俺のはISではなくASだ。だから俺ではなれない」

「じ、じゃあセシリアは…?」

最後の希望とばかりにセシリアの方を見る一夏だが…

「私も辞退させていただきますわ」



「そう言う訳だ織斑。これからクラス代表として精進しろ」

その瞬間、一夏はガツクリとさせながら席に座った。

「相良、暇な時で良い。織斑に基本を教えてやってくれ」

「了解しました」

だが、二名の女子は…篝とセシリアは何かを言おうとしていたが授業中との事で言えず、ただ宗介をじつと睨んでいた。

「では授業はこれまで」

「相良さん、一夏さんのコーチは私がやりますわ」

「何を言うのだお前は。一夏のコーチは私がやる。お前はすっ込んでいろー!!」

あれから二人は休み時間に入った瞬間、宗介の所にやって来て怒涛

のように言いだしたのだ。さすがの宗介も少し驚いていた。

「お、落ち着け。俺はあくまで基本だけだ。後はお前達に任せる」

宗介は元の世界で一夏と篝が付き合っている事を知っているし、セシリアとアルトのペアもよく見かけていたため。一夏を賭けて争う彼女達に戸惑いを隠せないでいた。

「あの二人、何言い合っているんだ？」

「はあ。こっちの一夏はいつか刺されるぞ」

「えっ、なんでだよ」

隣の席に座ってる一夏と後ろの席を借りてるラウラは三人のやりとりをみていて、ラウラはある事をおもっていた。

(ここの世界の一夏は間違なく主人公だな。だからこんなにモテモテ…するとまで来ていない鈴や王子、それにこっちの私も一夏にメロメロになるのか…それはそれで面白そうだな…)

なんてしょうも無い事を考えていたラウラさんであった。

そして、その夜。一年寮の食堂で一夏クラス代表就任パーティーをやる事になった。

ここで突然だが、宗介の世界との違いを説明をしておこう。IS学園、そもそも立地自体大分違っているのだ。宗介の世界でのIS学園は奥多摩にあるが、このIS学園は人工島に出来ているのだ。だから学園は海に囲まれていると言う立地になっている。

次に学園内だ。就任パーティーをやる場所として一年寮の食堂と言っているが、宗介の世界の学園には大きな食堂一つしかなく、この学園は学年ごとに食堂が用意されている。

そして、授業も事なる。宗介の世界の学園は勿論ISの事を学ぶがその他通常の科目も勉強する、むしろそっちの方が多い、ISは週に三回しか授業が無いのはここだけの話である。だが、この世界でのIS学園はISに力を入れているため、授業もISに関することが殆どになっている。

「というわけで、織斑君クラス代表就任おめでと〜」

一組の皆は食堂に集まっていた。勿論宗介とラウラもである。すると、一夏の周りにあつという間に女子が集まり、それをおもしろくなさそうに見ている筈の姿があった。

「どつしたのだ篠ノ之？」

「一夏のやつ、あんなにデレデレして」

そう言う筈の視線に、いつの間にか一夏に横に居るセシリアの姿を見つけて筈もすぐさま一夏の所に向う。

「それにしても、この世界の一夏達は見ていて面白いな」

「そうだな」

もみくちやにされている一夏を微笑ましく眺めている宗介とラウラ。

「一夏さん。明日から私と訓練をしましょう」

「何を言うのだ。それは私がやると言っているだろうが」

「相良く、ラウラく助けてくれ」

一夏の情けない声が聞こえるが二人は相変わらずその場でのんびりと眺めていた。

ひと段落すると各々は片づけて自分の部屋に戻って行く。宗介とラウラも部屋に戻ろう寮の廊下を歩いていると寮長をしている千冬に出会う。

「相良にラウラか…丁度いい。すこし話をさせてくれ」

「自分は問題ありません」

「私はアニメを見たい為、失礼します」

ラウラは何事も無かったかのように立ち去ろうとしたが、千冬はラウラの首根っこを掴み、そのまま寮長室に連行されて宗介もその後を追う。

「それで話と言つのは？」

「そうだな…お前達の世界の事や…そうだな、そっちの私の事を教えてはくれるか？」

「それなら問題ありません」

首をさすってるラウラを横にして宗介は自分が知っている限りでの千冬に関して話し始める。

「ふむ…そちらの私は二十六なのか…」

ちなみに、こちらの織斑千冬さんは二十四歳です。

「それに、まさか私が結婚してるなんてな…想像できない」

「こちらの千冬先生は結婚はしないんですか？」

「ラウラ、少し気になったのだが私に対して何処か慣れしたんでいる感じをするのは何でだ？」

そう聞かれたラウラは今度は過去の事を話し始める。時間は宗介の倍はかかっていた、聞き終わると千冬は複雑な表情をする。

「まさかそつちの私が一般大学、しかも弁護士を目指していたなんて。それに、ISがまさか…」

千冬達の過去のついてはまだ多くを語られていないためここではあえて省かせてもらう。だが、その話を聞いた千冬が険しい表情をするのには訳がある。

ISは一人の天災によって生み出された。生み出した人間の名前は篠ノ之束、篠ノ之箒の姉であり織斑千冬の友人である。

たった一人の人間によって世界がIS一色になった、その原因も彼女。そう、今の世界全てを作り上げたのは束と言っても過言ではないかもしれない。

だが、千冬は一旦天井を見て溜息を吐くと、再び視線を戻す。

「ふう…話を聞いているとお前達の世界、本当に不思議で楽しそうだな」

そういう千冬は心底宗介達の世界に興味を持った。それは、ISがあるにもかかわらず世界があまり変わらない、いや、それ以上にカオスになっている事に何処か惹かれているのかもしれない。

「いやいや。元の世界も色々ありますよ。織斑先生のハリセン痛いし、かなめのハリセンめっちゃ痛いし…」

ラウラはいない二人の（千冬は千冬だが、元の世界の千冬）愚痴を言っているが、千冬はそれでも笑いながらラウラと談笑している。宗介？宗介はと言つと。

「zzzzz」

第とセシリアの怒涛の責めに疲れていたのか、既に夢の中に入っていた。





### 第3話・クラス代表（後書き）

原作ですからー夏ラヴァーズは健在です（笑）

次回相方のレナードfがない中華娘の鈴の登場です

#### 第4話・中国代表候補生現る？（前書き）

お久しぶりです。何とか原作介入の方を投稿させていただきます。

#### 第4話・中国代表候補生現る？

さて、代表が一夏に決まってから数日。それはそれはとてつもなく平和な日々だったと思う…

「なあ宗介に一夏、さっき二組に転入生が来るとか聞いたんだが…」

「どつやら、中国から来る見たいだ」

宗介はそう言うが。この二人はその人物の事を既に知っているが、それだと辻褃が合わなくなるから知らないふりをしている。

「へえ〜どんな奴なんだろうな」

「ふん、今更になって中国は私の存在に危惧しているのですね」

こっちのセシリアのお決まりのポーズを言いながら三人が居る所にやって来る。

「一夏、そんな他の女子の事を考えている暇などないだろう！」

四人の会話の中に篠ノ之さんも混じって来ました。その後はお決ま

りの用に筈とセシリアは軽い言い合いを始めていた。

「なあ宗介。お前何やっっているんだ？」

「ああ、なに。軽く予習だ」

「お前真面目なんだな」

「いや…補習だけは避けたいからな」

宗介は元の世界での期末テストはかなりヤバ目だった。もし赤点を出した時はマオと千冬の鬼の補習が待っていた。

「それにしても転入生か、どんな奴なんだろうな」

「それより一夏、お前そろそろクラス代表戦だろ？」

ラウラは机にだらけながらそんな事を言う。クラス代表戦と言うのは簡単に言うと、学年の代表者が出るトーナメント戦の事である。

「あゝそうだった…マジでどうしよう…」

すると、クラスのドアが勢いよく現れ。そこにいたのは元の世界では色々和不憚な少女がそこにいた。

「ふっ…残念だけど、勝つのはあたしよ」

しかもその少女はカッコつけてポーズをとっていた。この瞬間を逃すまいとラウラは笑いをこらえながら写真を撮っている。

「鈴…鈴じゃないか。なに格好付けてんだよ」

「なっ…い、いいでしょう。そ、それより、その銀髪、何でそんなに笑ってるのよ？」

「くひひ…いや、すまない。私は気にするな」

「ま、まあいいけど…」

そこで鈴は背後に誰かいると感じ後ろを振り向く。するとそこにいたのは一組担任の千冬が居た。

「ち、千冬さん…」

「織斑先生だ。そこにいると邪魔だ、早くクラスに戻れ」

すると鈴は捨て台詞の様に一夏に言って自分のクラスに戻る。その後の展開は一夏と鈴が仲よさそうに？話していた事に幕とセシリア

は気になりすぎて授業に集中できない。千冬の制裁の流れだった。その後、昼食も原作と同じような展開が発生したため、宗介とラウラは離れた所で鑑賞していた。

「それにしてもこの一夏はモデルよな」

「俺にはさっぱり分からん」

「まあ…見ていて楽しいんだけどな」

わりとのんびりと会話しながら食べていた。それにしても相変わらず一夏ラヴァーズの三人はヒートアップしていて一夏が今にも死にそうになっていた。

放課後、一夏はクラス代表戦のために訓練する所だった…相変わらずの三人も一緒に…

「一夏、なんでこの二人が居るのよ？」

「そうですね一夏さん。それに風さん、あなたはクラスが違つので関係ありませんのですの？」

「そ、そうだぞ。それに一夏のコーチは私だ」

三人はIS（筈は打鉄）を纏いながら言い合いをしていた。

「…宗介、頼む」

「ああ。ではまずは…」

言い合いをしている三人を横目に一夏は宗介の訓練メニューを始める。宗介の信念としてISもASもガンダムも共通として体力がいと考えている。何事も素人の一夏に技術云々を教えるより最低元の体力は必要と考えていた。

「ちょ、ちょっとアンタ、なに先にやらかしてるのよ!？」

「お前達がそこで言い合いをしていたから俺が見ているのだが…」

「そう言えばアンタ何者？男なのにどうしてここにいるの？アンタもISに乗れるって事？」

「いや、俺はISには乗れないがASに乗っている」

「AS…何それ？」

鈴が宗介にASの事を聞こうとした瞬間、ランニングを終えた一夏がやってきた。

「そうか、一夏すまない。本来ならこの後も基礎訓練をさせたかったのだが…」

そう言って宗介は三人の方を見ると結構ヤバい目つきをしていた。

「そう言う訳だ。すまない」

「一夏、死ぬなよ（笑）」

そう言って二人はそそくさとアリーナから出て行った。

「ちょ…」

「では一夏…これから訓練だ…」

「一夏さん、沢山練習しましょうね…」

「一夏…カクゴ出来てるよね？」

少しの時間が経ち、アリーナから何かの悲鳴が聞こえたという。

その後、鈴が一夏と箒の部屋に乱入、いきなり部屋を変われと言う、箒は当然のように猛反対、鈴は一夏に昔の約束を覚えているかと聞く、一夏の鈍感スキル発動で違う意味でとらえていた、鈴マジキレ



する。といった流れが起きていたが、そんな事を一夏達の部屋の扉に耳を傾けて聞いていたラウラがいた。

その出来事があったか、鈴はしばらく一夏と口を聞かなくなってしまっていた。その間、宗介とラウラはこれと言って珍しく問題を起こさずに時が過ぎ代表戦近くの五月初頭。

問題の一夏の代表戦の相手はさらに喧嘩をしている鈴である事に一夏はかなり悩んでいた。

「さて一夏、俺はお前に基本的動きを教えた」

「ああ、確かに何となくだが実感が湧いてきたよ…ASならな」

そう、宗介の訓練とは一通りのことをして。応用として宗介が所持しているM9による訓練をしていた。

「ISに関してはまあ…何とかなるかな」

ISに関してはセシリアと篝の教えがあったが一夏は残念ながら余り理解出来ないでいた。

「まあ、宗介。俺何とかやってみるよ」

「ああ」

そこに、一夏と絶賛喧嘩中？である鈴がぶすつとした表情をして現れた。

「アンタ、あたしを怒らせておいてそのままって酷くない？」

「いや、だってお前が一方的に避けてたじゃないか」

「う、うっさい。じゃあアンタは女の子が何も言わなかったらそのまま放置するわけ？」

鈴が凄い剣幕な理由が分からない一夏、それと残念ながら宗介もであつた。

「だったら理由位教えるよ？」

「っ！……いいわ。だったらこうしましよ、アンタが私に勝ったら理由教えてあげるわ」

「いいぜ、俺が勝つたらちゃんと教えてくれよな。でもいいのかわか？今ならやめても良いんだぜ？」

何故か一夏はこの時、妙な自信を持っていてそれを鈴に態度で出していたのだが、鈴はその台詞に対してカチンと来たらしく。

「誰が止めるのよ、アンタこそしっかり訓練しておきなさいよ。ま

あ、幾ら訓練してもあたしには到底叶わないと思うけど。ふふん  
っ」

鈴も一夏の対して棘のある台詞を吐き、一夏もカチンと来て咄嗟に  
こんな事を言ってしまった。

「や、やってみなきゃわからねえだろ。この貧乳が!!」

その瞬間、一夏はヤバいと思ったが既に遅し。鈴は阿修羅像のよう  
な表情で一夏を睨んでいた。

「あ、あんたは今言っではいけない事を言ったわね…」

ドカア!!

次の瞬間、一夏は何かによってぶっ飛ばされていた。

「一夏…貧乳の…貧乳の何がいけない!!」

宗介は一夏をぶっ飛ばした人物を見る、するとそこにいるのは息を  
切らしているラウラがいた。

「男は皆胸ばかりみて…いいか、貧乳には貧乳なりに頑張ってるんだ。それを男共はそれを鼻で笑う…私は正直羨ましい…だが私は諦めない、いつか成長すると信じて」

それはそれは、ラウラの願望と欲望が混じってる事を言っ…

「だから私はお前のそんなふざけた幻想をぶっ壊す!!」

「いやいや、俺そこまでいってブフォ!!」

今度はニードロップを一夏にかまし、一夏はさらにぶっ飛んだ。

「いいか鈴、我々はまだこれから成長するぞ」

「う、うん。そだね…」

ラウラと鈴は一夏を放置して何処かに行ってしまった。

「大丈夫か一夏？」

「いや…めっちゃ痛いんですけど…」

こうして、原作一夏は鈴の怒りに油を注いでしまい、その鈴の怒りは爆発寸前だった。この続きは次回の対抗戦に続く。

「一夏、とりあえず頑張れ」

「そ、宗介!!」

**第4話・中国代表候補生現る？（後書き）**

宗介「次回は一夏と凰の一騎打ちのようだ」

ラウラ「ついでに、謎の敵（笑）も登場だな」

## 第5話・クラス代表戦（前書き）

ようやく一巻の最後の方のストーリーに行けた！

## 第5話・クラス代表戦

そして試合当日、第二アリーナに第一試合を行われる。鈴は既に「S”甲龍”を纏ってアリーナの中央に浮遊している。そして一夏と言えば…

「一夏、とりあえず俺はお前に出来る事だけを教えた。後はお前次第だ」

「ああ宗介。行って来る」

ピット内は一夏と宗介の二人しかない。セシリアと箒とラウラは普通に観戦のために観客席につてこの場にはいない。そして宗介一夏が出て行った後をじっと見つめ。

「何も起こらなければいいのだが…」

一夏は白式を飛行させ、待っている鈴の前に行く。この間、一夏は観客席の人の多さに驚いていたが声には出さないで前を向く。

「一夏…いま謝るんだったら許してあげても良いわよ」



「いいや謝らない。そして俺はお前に勝つぞ」

「そう…ならいいわ!」

試合の合図と共に鈴は甲龍の肩アーマーが開き”何か”放出したのだ。

「くう……今のは?」

一夏は肩アーマーが開いた先に何か光った瞬間、瞬時に主武装の雪片二型ガードをした。

(宗介との訓練が無かったら今のまともに喰らってたな)

「へえ、今の受け止めたんだ。やるじゃん、でも…」

一夏が少し落ち着いていると鈴が再び見えない何かを放つて来る。それも、最初の一発ではなく複数の数を撃ちこんできた。

「まずい!」

何とか避けようとするがいかんせん、見えない攻撃だ。何発か攻撃

を受けて一夏一旦体勢を整える為に地上に着地する。

「な、何なのだあれは？」

「ん…あれはたしか…」衝撃砲”っていったかな。見えない何かを撃ちだすって物だったな」

「正確には空間自体に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す…です」

ここは観客席。観戦している筈は見えない攻撃に質問し、ラウラが適当に答えた後にセシリアが正確に答えたのだ。

「だが、衝撃砲なんて久しぶりに見たな。最近の”鈴”は目の前のは別人のような戦い方をするから新鮮味があるな…」

はい、本編の鈴さんは投影やら強化やらまったくのオカルト能力を使って戦うので今のちゃんとした戦い方をする鈴にラウラ新鮮さを感じていた。

「どうした鈴、もう攻撃は終わりか？」

「ふん。本当の攻撃はこれからよ」

一夏は地上で鈴を見上げながら安い挑発をしながらある事を考えていた。

（宗介が言っていたこの雪片二型の特殊能力”バリア貫通”。これを上手く使えば一発で終わらせることが出来るが…あいつが言うにはこれは相当エネルギーを食うらしい。実際、前のセシリアの時もそうだったしな。そうなると…）

一夏が考えていると、鈴の両手に青龍刀を連結させグルングルンを回すと一夏に斬りかかる。

（よし、この攻撃を…）

一夏は至って冷静に鈴の攻撃を右後ろに跳んで攻撃を回避し、着地した瞬間。

「今だ！！」

両足を屈伸させ、PIC発生口からPICを出すタイミングを合わせ次の瞬間、一夏は物凄い速さで鈴の懐に入っていた。

「い、一夏さん。何時の間にあのような正確な”瞬時加速”を出来るように?」

「セシリア、今あいつがやったのは正確にはイグニッション・ブーストでは無い。エネルギーの消費を最小限かつ一瞬の高速移動をさせる技術”ファントム”だ」

ファントムはジンキと言う漫画に出てくる技術なので気になる方は読んでみよう!

「貰った!!」

「なっ!!」

ファントムによって大振りの状態で隙だらけの鈴の懐に入った一夏は雪片二型で攻撃をしようとした瞬間。

ズドオオオオオオオン!!

突如、アリーナ全体に大きな揺れが起き、一瞬の出来事に一夏は攻撃をやめ、二人は音がした方に視線を移す。すると、そこに居たのは…

「な、何なんだあれは…」

「一夏、試合は中止。一旦ピットに…」

鈴がオープンチャンネル一夏に言った瞬間、二人のISのハイパーセンサーから警告が現れた。それは二人が照準ロックされている…

「避ける鈴!!」

次の瞬間、一夏は鈴を突き飛ばすと鈴がいた所に黒い何かが放ったビームが通り抜けて行った。

「まずい、このままでは的になる、とりあえず動くぞ」

「う、うん」

二人はその場から飛行しながら黒い何かを見る。

外の状態も大変な事になっている。まずは黒い何かが一リーナ全体を覆うシールドバリアを破って現れた瞬間、破られたシールドバリアはもう一段と強化され、さらに観客席の方は非常事態発生の中でシェルターで覆い外の状態が分からなくなってしまっている。さらに、教師たちがアリーナに入ろうとするが黒い何かの影響でコントロールが奪われ、中に突中することが不可能な状態になっている。

「やはり、面倒な事になったな」

ピットで見ていた宗介も一連の事態を見ていた。今現在もシェルターで覆われて外の状態が確認できないでいる。

「アル、このシェルターは破壊できるか？」

『レ バテインのデモリッションガンなら破壊は可能です』

すると宗介は直ぐにレーバテインに乗り込み、シェルターから少し離れ、背中にある大きな銃を構えてそれを撃つ。ズドンと大きな音が響き、シェルターの壁が見事に破壊されているのを確認すると宗介は素早く穴からアリーナの中に入り、次の瞬間穴の辺りにシールドバリアが貼られた。

飛行しながら敵の攻撃を避けている二人だが…

「一夏、アンタは避難してなさい」

「それじゃ鈴、お前はどつするんだよ!？」

「あたしは戦うわ」

こういう押し問答を繰り返していたのだ。そして敵が次の攻撃に移ろうとした瞬間、再びアリーナ内に大きな音が響き二人は警戒して音の方に視線を移す。するとそこから紅い何かが飛び出してくるのが見えた。

「一夏、凰、無事か？」

「宗介…宗介なのか」

「ああ、とりあえずお前達は無事だな」

宗介の台詞に二人は大きくうなづく。

「アル、あのアンノウンを調べる」

『ラージャ』

「これから俺はあのアンノウンに攻撃を仕掛ける。お前達は離れていろ」

「ちょ…あたしも戦うわ…」

「わかった、頼むぞ宗介…鈴、離れるぞ」

「ちょ…一夏」

一夏は強引に鈴の腕を掴むと宗介から離れて行く。

「一夏、アイツ一人じゃ無理よ!!」

「いいや、逆に俺らがいた方がかえって邪魔になるんだ」

二人が後方に離れて行くのを確認すると宗介は単分子カッターを手を持って、レーバテインの爆発的とも言える跳躍で敵に接近する。

『軍曹、敵からの砲撃です』



宗介は空中で機体を器用に操りながら敵の砲撃を避け、砲門の一機に手に持っていた単分子カッターを投げて破壊する。敵の近くで着地すると腰にあるボクサーを取り出し、二、三発的に散弾銃を撃ちだす。

『軍曹、敵内部に生体反応は無し』

「無人…それなら思いつきり破壊できるな」

宗介は敵の…ISに人が乗っていない事を確認するとボクサーを後ろ腰に戻し、左腰にある長剣”ディムロス”を手にして走り出す。レーバテインの性能はまさに驚異的なスピードで走るかのような感じで、敵の砲撃など軽がると避け、宗介はまず左腕をディムロスで切り落とす。次にくるつと捻り下から上へと剣を振り上げ、右腕を斬り落とし。素早く両手で剣を握ると敵ISの両足を一刀両断、一瞬でダルマ状態になった敵は辛うじてPICで浮いているが宗介はディムロスを投げ出し、ボクサーを手にして敵ISに照準を向け。

「アル、ラムダ・ドライバーだ」

『ラージャ』

次の瞬間、何か見えないものがレバテインを包み、ボクサーから散弾銃が放たれる。同じ銃なのに先とは違う威力、敵はおおよそ散弾銃とは言えない威力の散弾銃をの弾を受け、八チの巣状態になる。

「これで終わりだ」

レ バテインが敵に背中を向けた瞬間、敵ISはその場で大爆発を起こした。

「刹那の真似は難しいな」

「す、凄い…アンノウンを一人で倒しちゃうなんて」

「……」

今の戦闘を見ていた千冬と山田先生は一瞬の事でなんて表現したらいいのか分からないでいた。それは隣で見っていた篤、セシリアも同じだった。ただ、ラウラだけは…

「まったく、敵を解体するなんて刹那の真似しおって…まあ、宗介には出来なくもない事だったようだがな」

余り驚いていない。まあ、当然と言えば当然だろう。

「一夏、凰。終わったぞ」

「ああ。それにしても宗介。やっぱりお前凄いな」

「そつでもない。俺は普通だ」

「ってアンタ、一体今の何なのよ!!」

鈴がうが　って言っているが二人は鈴を無視してピットに戻って行つてしまふ。

「あたしを無視するな」

無視された鈴は怒って二人の後を追いかけて行つた。

その後、一連の騒ぎでクラス代表戦は中止になり、二人の対決も無効になった。一夏と鈴はとりあえずアンノウンと戦闘をした事を山田先生に報告、その間宗介は千冬に呼び出されていた。

「相良：最後のあれは何だ？」

千冬が言う最後のアレと言うのは無論、ラムダ・ドライバーの事だ。

「申し訳ありません。あれはミスリルの最重要機密であり教えることが出来ません」

正確には宗介は全貌を把握していない。あの装置を全て把握しえるのは恐らくかなめ位しかないだろう。

「そうか…それにしてもお前の操縦技術には改めて驚かされたぞ」

「いえ、自分なんてまだまだです。同じ条件での戦闘なら自分より上の人物は沢山います」

宗介は色々な人物に出会っている為、このような台詞が出てくるのだ。

「ふう…この件に関してもう良い。そして一言言わせてもらおう…生徒や職員を守ってくれた事に礼御言おう」

「いえ、自分のやるべき事をやっただけです」

「結局、オジャンになったな一夏。鈴には謝ったのか？」

「ああ。鈴も許してくれた」

「そうか、その調子でハーレム大国を作れよ」

一夏と鈴の喧嘩は仲直りと言う形で収まり、敵の正体が判明する前に宗介が倒してしまい、クラス代表は中止となった。これで一通りの事件に区切りがついただろう。だが、次のゴタゴタは既に近くに迫って来ている…

## 第5話・クラス代表戦（後書き）

次回からは遂に二巻の内容に。シャルと遂に原作のラウラの登場です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3648y/>

---

IS<インフィニット・ストラトス> ふもっふ？

2012年1月13日03時48分発行